

今村和彦作 「親子」

ナレーション 小野寺君の家は農家で、4人家族です。お父さんとお母さんは、毎日畑に出て働き、小野寺君と2つ下の妹の利香ちゃんは、町の高校に40分の道のりを歩いて通っています。

小野寺 ねえ、父さん。おれ、バイク欲しいんだけど、買ってくんねえかな。おれ、もう免許取っちゃったんだ。

父 何?! お前、勉強もろくろくしないで、バイクの免許だと?! いかん。絶対にいかん。

利香 ねえねえ、お父さん。それ、わたしのお願いでもあるの。もしお兄ちゃんがバイクに乗れたら、あたし、後ろに乗っけてもらって学校まで連れてってもらうんだけどなあ。ねえ、お願い、お父さんったらあ。

小野寺 父 な、父さん。利香のためにもなるんだし…。

父 お前ら、さてはグルだな。いかんと言ったら絶対にいかん。もし事故でも起こしたらどうするんだ? 二人で心中するつもりか? 神様からもらった足があるんだから、歩け。大体わしはバイクというのはどうも気に入らん。

小野寺 父 父さんは古いよ。今の時代はスーパーカーの時代だよ。皆バイクぐらい乗ってるさ。

父 スーパーカーだかポンコツカーだか知らないが、とにかくお前にはバイクなんか必要ない。そもそもガソリンがもったいない。

小野寺 父 父さんだってトラクター乗ってガソリン食ってるじゃないか。

父 そ、そりゃ仕事だからだ。へ理屈こねてる暇があったら、とっと勉強しろ。来年受験だろ! お前がガソリン飲んで勉強してくれるんだったら、ガソリンの10リットルや20リットル、今すぐにでも飲ましてやる。

小野寺 父 もういいよ。だれが勉強なんかしてやるもんか!

効果音 (「バタン」と戸を閉めて出ていく。)

父 (母に) あいつ、一体だれのために勉強していると思っているんだろう。わしらの子供の時分には、親に勉強させてもらっているのを感謝していたものだが。なあ、母さん。

母 ええ。そいでもあんたは親に大学さ行かしてもらえんかったもんなあ。

父 だからわしはあの子を大学に行かしたいのだよ。幸い母さんもわしもまだピンピンしているし、あの子に大学さ行ってもらって、近代農業のやり方をたっぷり勉強してもらおうと、わしも安心して隠居できるってもんだ。

母 それに、世間体ということもあるし…。今では、大学さ子供やらないと肩身の狭い思いをするんよ。

父 あいつがもう少し出来がよかったらなあ。

母 そりゃしょうがないよ。あんたの子だもん。

二人 (笑う)

ナレーション さて、小野寺君はと言えば、望みがかなえられそうにもないので、がっかりした面持ちで翌日学校に行きました。

伊藤 面白い、聞いてくれよ。おれ、昨日の夜、その学校の前の一本道で、100キロ出してたんだぜ。気分よかった…。

高橋 ふん。おれなんかあそこで120出したことあるぜ。ちょうどお回りに出くわして、〈やべえ〉と

思ったけど。シカトして一直線よ。お回り、口をポカンと開けてたぜ。(笑う)

伊藤 やあ、小野寺じゃないか。いやにしけた顔してるな。

高橋 分かった。お前、バイク買ってもらえなかったんだろ。

小野寺 ああ。凶星だよ。うちのおやじときたら、とんだ頑固おやじだ。頭が古くて、バイクと言ってもてんで受け付けられないのよ。

伊藤 自動2輪… とでも言ったら、なんとかなったんじゃないか。

効果音 (一同笑い)

小野寺 それに、顔を見るたびに「勉強しろ勉強しろ」としか言わねえんだ。ほかに言うことないのかね。大体、自分だって昔、大して勉強したわけでもないのに、この遺伝でオツムの弱いおれに「勉強しろ」なんて、親の身勝手さ。

伊藤 お前のところも、やっぱり親子の断絶だな。おれも親の希望を押し付けられるのがたまらねえぜ。

ナレーション さて、そんな会話のあった数日後、小野寺君のお母さんは、学校に呼び出されました。

母 あのー、息子が何か？

先生 「息子が何か」じゃないですよ。岡さん、主行君、落第寸前ですよ。困りますなあ。一体うちでどういう教育をなさっていらっしゃるんです？

母(モノローグ) え、あの子が落第… そんな…。「勉強しろ」とは口うるさく言うのですが、どうも言うことを聞かなくて。それにテストなんかも、見せるように言っても、破いてしまったとかなんとか言って、見せたためしがないんですよ。

先生 子供は、親が「勉強しろ」といくら言ったって、勉強なんかしやしませんよ。もっと勉強できるような環境をつくってやらないと。

母 でもそれは、学校のほうで、なんとかしてくださっているものとばかり思っておりましたけど。

先生 困りますなあ、お母さん。学校教育は家族教会の上に成り立っているんです。

母 (ため息)はあ…。

先生 それはそうと、お宅、進学希望でしたね。正直言って、このままじゃちょっと無理なんじゃないですか？

母 え？ そんなことおっしゃらずに先生、主人も私もあの子だけにはぜひ、大学に行ってほしい…。無理だなんておっしゃらずに、そこをなんとかお願いします。

先生 そう言われてもねえ。

ナレーション お母さんは家に帰ると、お父さんに学校でのいきさつを話しました。

父 な、なんだって?! (間)利香、ちょっとお兄さんと呼んできなさい。

利香 お兄さ〜ん。お父さんが呼んでるわよ〜。

ナレーション 小野寺君は、今日、お母さんが学校に呼び出されたことを知っていたので、ビクビクしながら降りてきました。

父 そこに座れ。

小野寺 なんだよ、わざわざ。

父 まあいいから黙って座れ。今、母さんから聞いたんだが、お前、学校の成績ひどく悪いそうじゃないか。

小野寺 …。

父 そうなんだな？

小野寺 …。

父 黙っていちゃ分からん。そうならそうと言え。

小野寺 だって父さん、「黙って座ってろ」って言ったじゃないか！

父 へ理屈こねるな。おれも母さんも、お前をそんな子に育てた覚えはないぞ。

小野寺 なんだよ。成績悪かったからって言って、どうだって言うんだよ。おれ、どうせ百姓になるんだろう？ 勉強なんかしたってどうにもならないじゃないか！ 要するに父さんも母さんも、おれを大学生かして、世間体良くしたいだけなんだ！

母 お前…。父さんに向かってなんていうことを。

小野寺 おれは父さんや母さんのロボットじゃないんだ。おれの好きなようにやるよ。

母 (泣き声で)お前、お前、わたしや父さんがなんのために、こんな年にもなって、朝早く起きて野良に仕事に出かけるか、考えたことがおありかい？ みんな、みんなお前のためなんだよ。お前に大学さ行ってもらって、父さんよりも少しでも立派な人間になってもらいたい。ただそのことを思っただけで毎日汗水たらして働いているのに。お前って子は…。

小野寺 そんなこと言われたって、おれは父さんや母さんの思いどおりにはならないよ。

父 まだ分からないのか！

効果音 (平手打ち)

小野寺 イテ！ おれ、もう絶対大学なんか行かないからな！

ナレーション そう言い捨てて、小野寺君は家を飛び出し、うっぴん晴らしにバイクに乗せてもらおうと、高橋君の家に行ったのですが、あいにく留守でした。

彼は孤独でした。無性にだれかと話がしたくなり、以前から好意を持っていた同級生の今村君の家に行きました。今村君はクリスチャンで、それまでは敬遠しがちだったのですが、この時ばかりは、彼なら話を聞いてくれると思えたのです。彼は一部始終を打ち明けました。

今村 ふーん。そんなことがあったのか。まあ、おれが行かないからというわけでもないが、大学行っただって、人間、偉くなれるとは限らないよなあ。

小野寺 え、お前、あんなに成績いいのに、大学行かないのか？

今村 成績のことはともかく、本当は行きたかったんだ。けどおやじが病気しちやっただろ。働かなきゃな。

小野寺 なんか、お前を見ていると、おれがとんでもない甘えん坊に思えてくるよ。

今村 いや、おれだって大変な甘えん坊さ。でもおれは、親よりも神様に甘えてるんだ。神様はおれを愛してくださった。その愛に甘えていられるからこそ、おれは人を、そして親を愛せるような気がするんだ。確かに親は子供を自分の思い通りにしたがる。時にはそれは親のエゴ(身勝手)であることもあるけど、でも、どんな親でも、子供を愛しているし、子供の真の幸福を願っていろいろ口うるさく言うんだろ。お前のお父さんだって、お母さんだって、大学に行くのがお前のために一番いいと思って、そう言うんだと思うよ。でも、お前の話を聞いていると、お前が”勉強するのがイヤだ”という理由だけで、逆らっているような気がするんだが…。

小野寺 うん。…そうかもしれない。

今村 おれはな、親に愛されていることを、神様に愛されていることを知ったあとで、初めて気づいたんだ。時には親は身勝手に思えるけど、でも親が産んでくれなければ、おれはいなかった。

たんだし。それに、聖書には、「あなたの隣人を愛せよ」と書いてあるんだけど、考えてみたら、おれの一番近い隣人は親なんだよな。

小野寺

おれ、父さんや母さんの気持ちなんて、考えたこともなかった。おれのほうも、自分勝手だったのかなあ。おれ、もう少し考えてみるよ。

聖書の言葉

「子どもたちよ。すべてのことについて、両親に従いなさい。それは主に喜ばれることだからです。父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。(コロサイ人への手紙3章20節～21節)

<完>